

生活空間と人間性の発達——その1 住教育的考察

The Space of Life and the Development of Humanity

Part-1 A Study of Housing Education

樋口眞基子*

Makiko Higuchi

1. はじめに

人はそれぞれの個性を生かして自己を実現し、生命感を感じることができる。誰でも自分らしい行動や言動・仕事ができるとき、生き生きとした躍動感を感じることを確信している。

学生が就職活動を始めると、必ず「自分が何をしたいのかよくわからない」といった相談を受ける。また、設計製図の授業で、生活空間の構成を図面上で思考する学習をするのであるが、何をどうして良いのかわからず建売住宅に似たプランが誰彼となく提出される。イメージしたり、思いめぐらしたりすることが不得手であるらしい。どうも、自分が何を欲求しているか知ろうとして立ち止まることなく、流された生活を送っている。いわゆる刹那主義者である。

基本的にすべての人は「人間とは何か」、「どう生きるべきか」、あるいは「どう生きられるか」を問わずにはいられない。こうした問いかけはあらゆる場所、あらゆる人々においてつけられても不思議ではないのであるが、日常そのように挨拶することは稀である。

筆者は教育目標に「自己の確立」の達成を掲げてそれを助長するべく学生とのコミュニケー

* 住居学専攻

ションに心がけている。外的な刺激を強烈に与えて、個人の人生の重要な時期であることを気づかせ、自己分析を徹底的に行わせている。各個人が、その儀式を通して自分という元型⁽¹⁾の何たるかを意識するようになる。ただ、それを十分に用いてこそ自分であることになかなか気づかない。

そのような時期は現在における社会との関わりだけでなく、個人を取り巻く歴史という過去からの関わりを集積によって、社会的・環境的に規定され個人が形成されている。自分の属している社会・集団に適応し、準拠していくという過程が生きていく絶対的な方法であるかのような考えが無意識の内に生まれ、そのことに慣れきってしまっている。ところがある時、そのような生き方に行きづまり、このことに気が付く。これでは、人間性が常識的といわれる人間にとどまるのみで自由性がない。

個人は重要な体験をした時、自ら文化を越えて⁽²⁾他者や人類にむかって自分を開き、自覚的に個を解放し、他者と関わっていくように変化させられていく。個人を主体とした生活体験は自己を確立していくためのよりどころになる。自己を確立してこそ人間関係を理解することができ、新たな体験はさらに人間性を深め、発展

させることになる。こうして人格的成長をとげ、創造的な実を結ぶものであることを確認していく。

研究ではもちろん、普遍性を求める思索に発展させながら「自分はどうか」、「あなたはどうか」、「この学生は何かの為に生きているのであろうか」という具体的な問いを含めて、教育的配慮を強化してもしすぎることはないと思う。

Ⅱ. 課題と方法

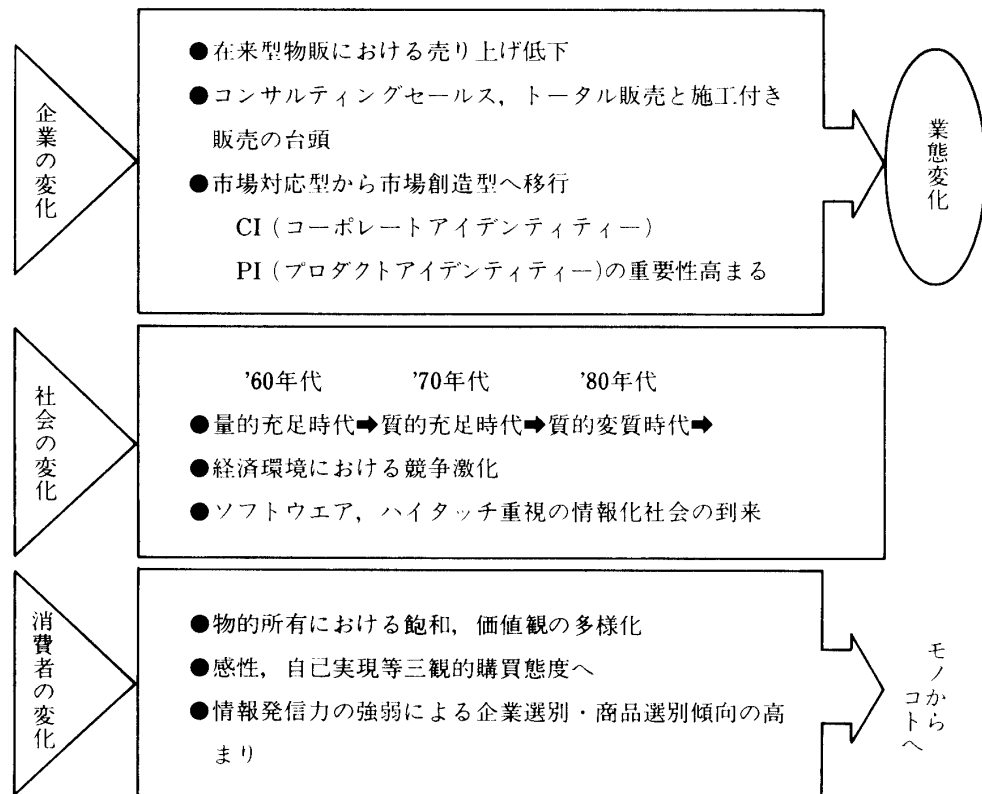
人間性は概念的に固定されたものではなく、つねに変化していくものである。そしてその変化発展していく心の世界はイメージとして典型的に日々あらわれている⁽³⁾。このイメージ療法の妙味に着眼して住空間に心の変化とあり様を観察する。自己探求と人間理解に及ぶだろうと発想したからである。

今回は自己確立の現代的意味を考察し、個人

の体験的な実証によって試行的に空間と心の変化を観察するに留まる。方法を精神分析のカウンセリングに倣うものである。したがって、このような研究方法による成果に客観性があるかどうかの検討を進めつつあるものであることを付記しておく。

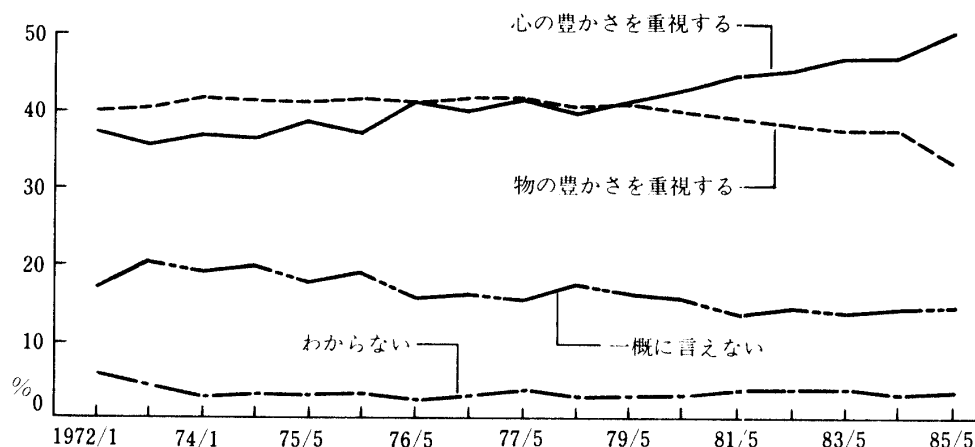
Ⅲ. 時代的要請

日本は過去数十年間に農業社会から工業社会への転換を行ったように、いま、さらに時代は情報化社会への移行が進行しつつある。新たな展開が各分野で始まっている。一人一人が主人公になれる社会という文化基盤が生まれようとしている。今日の社会に求められるものは自らのすべての活動の潜勢力の実現に対する権利としての所有権の拡大であり、その実現をめざすための主体形成である。それを如何なる形で成熟化していくかが課題である。



〈出所〉(社)インテリア産業協会需要動向調査報告書

図1 構造変化



〈出所〉 内閣総理大臣官房広報室「国民生活に関する世論調査」(1985年8月)

図2 国民の意識・価値観の変化

1. 構造転換

生活のモノの量的・質的が問われて久しい(図1参照)。戦後の国民生活の日本の特徴はアメリカ的生活様式の輸入・移植の過程として把握することができるという⁽⁴⁾。それを象徴する耐久消費財の普及は、外見的生活の華やかさの背後で、多くの生活の歪みや金融資本による家計支配を押し進めたが、他方で電化製品等の耐久消費財は家事労働を削減・合理化する上で大きな役割を果たした。しかし、そうした耐久消費財の普及が一巡すると今度は国民の欲望水準は多様化し、かつ一段と高度化せざるをえない。一方で、日本の国民としてこのような一面化された消費を強制される単なる消費者としてではなく、生活者として全体的に自己の労働や生活を見直し、主体的に生きること生活の豊かさがあることを気づき始め、真の豊かな生活や自己実現を求める気運が高まってきている(図2参照)。

いままで産業社会の産業を発展させるための知識と同様に、個人生活において如何に生活していくかといった手段についての知識もずいぶん発達してきた。個々人は自分が何をやりたいのかという目的をもって働いてきた。しかし、そうやって産業社会の時代を過ごした現在、真の豊かさとは何かということが問われている。

自己実現は個人のものとどまるものではな

く、社会で共有できてこそその真価を示すことができる。そして社会の中で個を自覚しながらお互いを感じていくことが豊かさである。

構造の転換をはかるには、個々人の能力の発展が大切である。労働時間の短縮や教育制度の充実と結合することで国民の労働能力や消費能力は開花され、新しい生活様式の担い手となりうるともいわれる⁽⁵⁾。各界でいま個々人の能力開発に期待がよせられているのである。

2. いま教育は

臨教審の最終答申の発表で現代の教育の問題点が明らかにされた。学校は、明治5年の「学制」以来西洋文明に「追いつき追い越せ」体制のもとに組織されてきた。しかも教育は、経済産業構造が目指したように標準化と規格化が一般化され、効率的かつ経済的に構成されてきた。いまや、西洋なみの近代科学をもった豊かな国になったところで、日本がその経済力にふさわしい大国となるには独創的な学問や芸術をその中から生み出さなければならないと誰もが痛感している。そこで従来の教育や研究のあり方を見直さなければならないことを指摘し、自由・自律の精神の育成が求められている。古くて新しい視点である。

Ⅳ. 主体形成——住教育の立場から

健康であるということは身体的、精神的、社会的に良好な状態であることをいう。健康に影響する要因は多々あるけれども、住教育の立場では環境と生活様式が重要であることを理解しなければなるまい。特に居住性の問題は、居住地での人間関係に関わってくる。どの様にしたら陸みあえるかが共生の時代に備えることであらう。

住教育は住む主体者を育てる教育であるとい⁽⁶⁾、また、住教育は生活のしかたを取り扱う学問であり、生活はだれもが体験している。だから、生活体験をそのまま纏めても生活のしかた研究だという一面がある。但し、体験中心で現代生活の問題を捉えきることはできないであらう。しかし、生活のしかたの問題が主体的に豊かな生活をしていくことにある限り、主体的に生きている人の体験こそが、生活主体と生活手段としての環境である生活を成り立たせている基本的な実体であると仮定するならば、生活の主体的実現過程こそ問われているのである。

したがって人間性の変化発展することに着眼して根本的には主体的に生きることを追求しながら、主体性を獲得することが先決であると考え、今回は精神的思想的な問題内容をとりあげている。

1. 生活様式

モノから心の生活へ構造転換が迫られているということを理解するのに、欲求→思考→行為という単純な図式によって考察し整理する。基本的に言語は時間上の道具であり、モノは空間上の道具である。それらを使って思考し、表現する。

人間の行動様式(生活)は自然的環境であれ、社会的環境であれ、本質的には環境に対する適応行動と考える。もちろん行動を個体の側からみれば、個体の内側から動かして適応行動反応を起こさせるもっとも重要な要因が人間の持つ

欲求であり、欲求があらゆる個体(人間)的なエネルギーの源泉になっていることは否定できない。欲求を充足するために、人間は反射、あるいは本能的行動をのぞいては、一切の学習、模倣にしろ、試行錯誤にしろ、さらに高度な知的判断にしろ、考えて行動する。つまり、人間の行動反応の中に思考が介入する。しかしながら、無数にある人間の行動も習慣的に発現することが非常に多い。この行動過程の特徴が、先の図式の思考過程の脱離という点にある(欲求→(習慣的回路)→行為)。これは常に一定の社会では試験済みという前提に立つがゆえの「自動的」である。つまり、同じ社会に属しているものは同じ習慣を持ちやすい。またそれを持つ結果、彼らは理解し合うことが容易であるし、協力しあうことができる。ところが、この社会の枠の如何によって即座に順応できないときにはお互いを理解することが難しい。それは個体の欲求に呼応するというより、個体のしかたを批判してしまうのが常である。以上のことを、ルドルフ・アラース⁽⁷⁾は「あらゆる人間が小さな固有の私的な世界をもっているともいえる。その私的な世界が次第に拡がることによって共通の世界が狭くなればなるほど、それだけ人間は理解しがたい存在となり、病的なものに見えてくる。少なくともその人間はそのような第一印象を人に与えるであらう。しかしながら、その人間の私的な世界がわれわれ一般の世界や大多数の人々の共通的な世界に比べてみると、どんな具合にどんな点で異なるかをわれわれが理解し始めたときには、われわれはその人間の複雑多用な世界についても理解するようになるかもしれないのである。」と精神的に洞察している。

日本では人間を個的存在として捉えることが育つ土壌が風土的になかった。ところがいまや人間の存在意識が集団的から個人的に移り始めてきたことを、国民的に認識を深めなければならない時にきている。またそのための感覚を育成することが必至である。図式の思考回路で習

慣よりも思考を中心にした行動様式をとることが、日常的に考えることであり、「心の生活をする」ということであろう。したがって、以前の行為から発想する時に犯しがちな「型認識」の危険性から逃れることができる。個体に対して個体が存在し、それぞれが独立していることを受け入れるべきである。

もう一点、日本的な特徴を新聞の記事⁽⁸⁾に見出せる。ストレス解消のために始めたスポーツも、服装に癡るわりには靴がお粗末であったりすることが英国人には不思議に思えるという内容のものである。中には心から欲して始めたスポーツも段々目的が見失われて、義務感でしている人も少なくない。これは日本人の行動様式の典型的なパターンであるといえないだろうか。

個体の欲求に対して目と耳をもって鋭敏に受け止めたなら、その内的促しを実現させるために思考して、行動することが、自己実現・自他の尊重を表すことになる。そこで人間観が対決させられ、止揚、発展させられ、普遍性をもっていくプロセスが大切であり、一方、個人個人の思想がますます個性化させられて、ユニークな自己発展に結びつくものであろうという⁽⁹⁾確信を持つことが、一人一人の人間に与えられた生命に対する挑戦的な醍醐味であり、個が主体的であるといわれるところである。

2. 欲求

欲求とは、自己の根底における個体的な生命が絶対的な中心点に集中していく力として考えられる。そうである欲求に対して、そうでないものが対立して存在する。図3に示すように、前者を現象的（体験的・知覚的）——森有正のいう経験⁽¹⁰⁾、後者を表象的（確信的・イメージ的）と定義する。前者が人間の発達の力であるのにたいして後者は他人を支配する力である。この関係が民主主義の背後にある2つの力の概念であるとスクファースンは主張する⁽¹¹⁾。精神性の面で見ると、前者は共存的であるのにたいして、

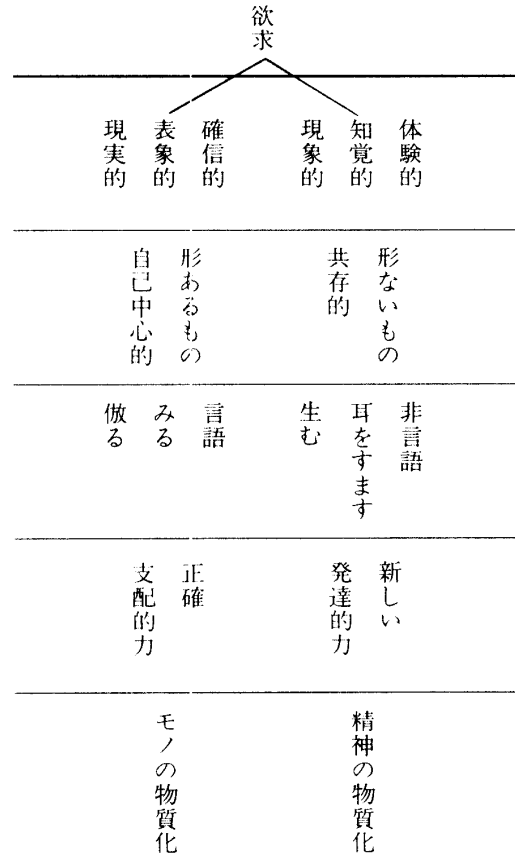


図3 欲求の諸相

後者は自己中心的である。

時として、欲求は思考の場で活動する際に自ら案出した一群の捕獲術・まん着術に還元されてしまう⁽¹²⁾。このために人間は欲求の浄化を守ることが義務である。

現実では欲求とは心の叫びである。たとえば、ある段階に人間はつねに生きがいを求めているはずである。生活が軌道に乗り、安定しているかのように見えている大人も、単に皮相的な自己満足や豊かさではない生きがいを求めてさまよっている。自覚的に自らの人間性の発露、生きがいを求めることはまさしく生きる意味を考えることに等しい。しかし、この自覚のないままにずるずると周囲の状況に押し流されて、まるで操り人形のように漠然とした日々を過ごして年をとってしまう。そして日常の出来事が断片的で何の実りをもたらさないことを憂える。内外的誘引によって自分は何だったのか、惰性的な日々嫌気がさし、愚痴と呟きの

多い日々空しさを覚え、いにしえの日といにしえの年を思うのである。

このように内外的な束縛から解放されて、自分の本当の力、その人の生き方で、その人なりの個性を発揮していくことを自己実現と呼ぶ¹³⁾。したがって、「生きがい」というようなことも、どれだけ自己実現の道歩んでいるかということに関係している。おそらくそれはその人の年齢を問わず、全ての人が、その人なりに見出していくことができるものなのである。ただ、自己実現の自己とは何かを、常識を越えて考える必要がある。自己にまつわる幻想や思い違いを取り去ったとき、個人的自己に固執しない自己に出会ったとき、本当の自己実現の道が見えてくる。

たとえば、ある既婚女性の自己実現に至る経過から人間性変化を見ると、カウンセリングの面接の中で、彼女は小さい頃から何かをしなくてはいけないということに、極端に縛られていたことに気づいた。したがって彼女の行動様式はいつも破目がはずせず、何をしても本当に夢中になれず、自己吟味をしている自分があった。人間関係においても、心からの率直なふれ合いがなかったということも気づいた。こうしたことを頭の中で今までにも反省してきたのであるが、カウンセリングの中で彼女は正直な気持ちをありのままに語り、その実感を自分に許すことによって、他人が自分の中に入り込むことを受け入れることができたのである。徐々に物事に自然な関心や興味が持てるようになってきた。不必要な自己制限をしないで、主体的に自分の好きな仕事に没頭できる気持ちになった。隣人関係においても積極的に交われるようになり、その時は人のために働くことが非常に義務的ではなく、うれしいものになってきた。そして今後は生きていく意味を伴った人生を送れるような気がしてきたというものである。

以上に述べたようにカウンセリングにおける自由で率直な関係の中で、常識的な心の防衛本

能がほぐれたとき、そこに人は本当の自分の姿をまざまざと見出す。それはその時が選ばれたごとく、その前であっても後であっても成立しなかったであろうといえよう。それはその時が選ばれたとさえ思われるもので、以前ならば決して人前でみせられるようなものではない、弱い情けない姿であるかもしれない、苦しく悩みにみちた打ちひしがれた姿が現前としている。だがそうした赤裸々な姿をあからさまにしたとき、少しずつ、本当のみずみずしい自分が息を吹返しつつ生命力をつけてくるような感じに至るようになる。今までは雑草のごとく強いものであったのに、一転して内なる魂は非常に傷つき易くなっている。いやされ、慰められ、帰るところを持ち合わす喜びがある。だから、肉体はどんなことにも耐えられ、それを生かすように働く。自由に動き回ることができ、可能性のある広い世界を舞うようである。一方で、自分自身を深く感知しながら、他者の動きと自分の周辺をありのままに感知し、自分らしく主体的に生きる気持ちになれるのである。

そうしてこそ、生命に向かった力を感じるのである。それがまさしく欲求であるといえよう。

3. 思考すること

「考える」ということは試験し、操作し、変換することに他ならない。それも高度に処理された現象しか入り込めないように実験を調整しておいて、かくてありとあらゆる当てどもない企てが生じてくる。ここでは個人の装置によって記録されるより、作り出された現象に意味がある。マルクスの業績は価値学説を一種の人間学に転化させ、「使用価値」と「労働価値」の区別を明確にし、それを社会的実践や、現代社会の具体的生活の中に認識したことでありと小此木氏は評価している¹⁴⁾。資本主義的な消費家達は人間の尊い心の所産をすべて「物」としか見ないで、味わいむさぼる嗜好や鑑賞の手段としてしか理解しない。人間は自ら生産する術を見失

い、ただただ安易な既成価値の利用者に転落し、安定ムードに自己を見失う。労働価値の欠点は社会変革について、人類の歴史的な価値の積み重ねを無視し、全くの不連続、既成価値の否定を主張するところにある。この矛盾と不連続は人間の存在の意味を空しくする。精神療法家のフロイトは個人中心主義の精神療法の営みの中で断固として価値生産的志向的な人生を貫いた。

以上を思考の支配する価値のモデル化として図4に示す。思考を動きのある機能的な針と見なし、中心に設定する。周囲には思考の材料になる素材が点在している。その関係を操作し、構成し、調整する動きを思考と定義し、その場を「使用価値」、「労働価値」と設定するならば、そこで欲求の力を受けて針が動くものであると考える。一般的に日常生活を歩むものはAの型に代表されるのに対して、フロイトはCの型といえよう。

とするならば、A または C という二者択一ではなく、両者を区別した思考の場 B を使い分けることが、共生の時代にふさわしかろうと考える。

現に A も C も存在する思考の価値型であるから、それを受け入れることが共存することでもある。即ち他の存在を受け入れることが自己確立の成立である。また欲求を実現し、達成しようとする場合にもその相互間を調整することが大きな条件としてあげられるであろう。

4. モノの存在と現われ

時の流れの中では、知覚できる事象もしくは

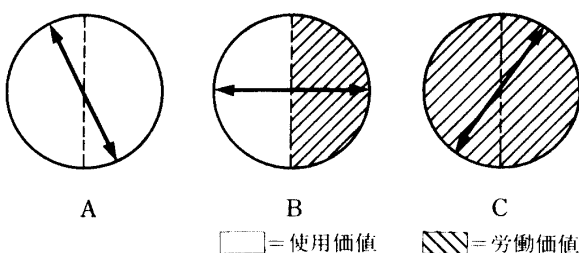


図4 価値のモデル化

事物的事象の考え方からして、対象となる事象の世界は社会的生活のあり方と相対的である。また、物的事象ということは決して人間の知覚にとって必然的な構造ではない。それは、歴史的・社会的・文化的に形成された生活環境と生活状況によって媒介された歴史的・社会的・文化的な所産なのである。物的事象の世界が人間の知覚にとって当然であるかのように思念することをさけるべきである⁹⁹が、基本的には空間に現存(一時的でない)するものとの関わりにおいては、個人の人となりモノ化していることをみのがすことはできない。なぜならば、モノの存在とはパルメニデスの断片「なぜなら思考と存在は同じだから」を引用して、思考しえないものは存在しえず、存在しているものは思考(生産的)の射映と考えるにしたがうからである。

それに対して現われを生産的にとらえるのが当をえないのならば¹⁰⁰、感情表現(ここでは欲求の精神性)として定義する。感情表現と思考とは別の次元である本能的な場合をいうことができるであろう。

空間構成のモノの存在と現われは人間の行動様式が時間的に蓄積された現象としてとらえることができる。

道具が空間にあるときそれを存在とするか、現われとするかである。下記に示した物質性と道具性の何れかの性質が、主体者もしくはその場を共存する人の思考の中にあるならば、モノが露出していることは存在とみなす。利便性と合理性が主体と客体の関係で成立しているからである。

物体 ①延長性を備えた質的(そのもの自体動的)

②惰性体、つまり、〈静止〉

③剛体〈排他的定位置〉

④可動体〈動〉

①は生物体にも妥当する。②③④は家具や食器をはじめとする諸々の人造品、道具その他の耐久消費財と称するものである。

- 道具 ①物質性〈剛体的な恒常性と移動の可動性〉
 ②道具性〈道具としての機能的有意義性〉
 ③用材性〈危険か安全か〉

思考外であるならば現われとして見なす。現われはすでに欲求の次元であるが、それを実現する考え方を支配する世界が2通りあるから、精神的欲求においては精神の物質化として現われ、現実的欲求においては社会的・環境的・個人的・役割的・年齢的・性別的他といういろいろな要素が取り入れられる。

人々は自己形成をしていくと同時に、自己の周辺に自己中心的に1つの世界をこれらの物体で構成していく。住居は最も小さな空間であるが、個人主義化した個人が集まって住むためにいろいろな要求が取り入れられている。

個人の空間は他人が見ても、決して空虚なものではなく、その中で個人の行動が連想されることから、個人の部屋は「個人」の思考の発展段階を知る手がかりであるといつてよかろう¹⁷⁾とにいされる由縁であろうか。

共有の空間においては「共存」するための自他の精神性の所在が問題になる。個人の欲求が計られるといつてよかろう。たとえば、家族間の力関係、秩序が反映されているだろうし、家風によるものであるかもしれない。共有がうまくいかないとき、喧嘩とならないためのルールが秩序を保つために成り立っている。だから日常ではそのルールが破られたと感じられるような知覚現象がたまに起こると、そうしたとき個人の中に何か感情的に支障があることを知ることができる。どうにかして他者を受け入れ、和合して住むかという気遣いをしながら個人的な好みをお互いに受け入れることのできる関係と、なかなかそうはいかない場合がある。居住地における「人間関係」、「家族関係」を知る手がかりとして、モノの現われをみることができ

たとえば、外山氏¹⁸⁾は家族システムに対する

住居のはたらきの中で住居が家族のメカニズムを破壊しているのではないかという。原因は親の人間性に問題がある事ははっきりしている場合でも、すでに立派な大人に人間改造を迫るよりは、住空間の改造をすることの方がずっと早いからであろう。家族システムを住まい方によって操作したらどうだろうかと述べておられる。根本的な原因が個人の行動様式の回路において思考にあることがわかっているのに、現象面のシステム改造論を勧めることは些か、実力行使的な一時しのぎに過ぎない策のように思われる。

問題が顕在化したときに、モノの存在と現われから、その原因を身体的とみるか精神的とみるか、みきわめることが必要である。もし、その環境の不自由性が身体的原因に起因しているならば、ただちに適当な状態に整備することがのぞましく、また可能であろう。身体的原因によらない場合には、いささか慎重に対応すべきである。即座に物理的恩恵に転嫁させた環境整備にむかうのではなく、その不自由性が居住地における人間の力関係または個の人間性の発達途上のどこに起因するものであるかを推察した上で、人間関係の是正、人間性の発達を促すような住空間への構成としつらえを考えることが重要であろう。

V. 体験的実証例

森有正流の経験的体験を述べることで、この研究目的の端をきることになる。3年間の時の流れの中で自己探求と迷いが外的な力を受けて、自己達成へと助長された過程を内的促しにしたがって整理し、人間性の発達に伴って起こった生活空間の変化を省察する。

1. 精神的变化

コミュニケーションは2つの世界で成立する。たとえば、先述した「使用価値」と「労働価値」、「実証主義」と「論理主義」¹⁹⁾、それから「パン」と「神の言葉」²⁰⁾に對的表現される世界

が当時に存在しているということを体験的に知るために人生の前半を費やしたと言ってもよからう。

いままでに会った数々の体験も「人生いかに生きべきか」の問いに対する回答を示唆するものであった。その関係に十分に影響を受け、心身共に成長させられ、成熟しているものであるという実感を伴いながら、文化的・社会的な階層集団に属していることで満足していた。ただ、そのほかの階層では生きることは忍びがたかったであろうと自戒する。なぜならば、文化人類学者の山口氏がいう²⁰⁾ 文化的差異をつけることで自分の優位性を感じていたからである。だから、その集団で生きている限りは相対的な世界のことであるから、絶対的なものを見出すことは無理であるということに気が付かなかった。このように体験的出会いと思われるものさえ、自己確立の段階的なものであり、徹底的に人に仕えることを可能にしない。これは主体的に生きているとは言い切ることができない点で問題を含んでいる。時間の経過と共に「何の為に生きているのか」という疑問が浮上してくるのであった。あたかも人生を惰性的に生きていることに自分の存在が危うくなってくるような憂えをおぼえた。

「あなたの生きがいは何か」「あなたは論理的でない」「ほんもの²¹⁾こそ生きる意味がある」「何の為に生きているのか」等々の言葉を自らの世界でもてあそびながら、本人の周囲と頭の中ではすでに勝利した者のごとくそのように生きたいというムードで暮らしている。しかし、言葉の真意をつかめぬまま、行動様式も不自由である。このことを小此木氏は、主観的、観念的、消費的、遊技的などと形容している²²⁾。観念的自由主義にとっぷり浸かっている。精神の物質化も薄々試みてはみるのだが、いつの間にか忘れていた。そんな時「生き方が間違っている」ことを悟り、大きな衝激を受けた。いままで、より頼んで来た生き方を捨てることになる。そうしてわかったことは非言語の世界に仕

えることであった。ここに後者のコミュニケーションが始まり、生命力を感じながら自己とその背景の世界が見えてくるような生活に変わるのである。

喜んで人に仕える業を望むようになり、自ずと己が後退する。不言実行型の頑張りと言われるような精神の物質化も喜々として実行できるようになる。

その精神性が現状の空間構成を存在たらしめているし、モノとの関わりの中で、己の人間性を見出し、他者の人間性をも観察しその現状を認識することの手がかりとなり得ている。

2. 空間構成の変化——設計準備室

(1) 設計準備室の家具配置

設計準備室は教員と学生の為に図書閲覧、採点、教材作成、打ち合せ等の用途に開かれた施設である。助手である筆者はそのような行為に支障がないように整備しておく管理者であり、そこで個人的な学習、製図、研究等もする。

設計製図室の開設当初(1984年)、10m×3mのスペースの空間を構成するにあたって利便性を考慮した上で、2通りのプランを作成した。そのプランは模様替え前後のものに相当している。3年後の現在、当初より書籍数の増加と学生数と教材が定まったことで書だな(高さ:1800)2本と図面キャビネット(高さ:1270)を追加させた。確かに機能用途が確定してきたことが模様替えの起因にもなっていないわけでもない。ただ、当初、図5の構成(模様替え前)を採用した大きな要因は個人的な場としての空間を確保することに強く固執していたからだと言っても良からう。その方法として、家具の高さで、行為別に空間を分割することであった。つまり、確保するために囲んだ空間をつくり、外部から見えなくするような構成であった。各A・B・C・Dの区画が断片的な場であり、雑然としていて使いにくく閉鎖的な空間構成であったと言える。学生の目には個人の研究室として映っていた。

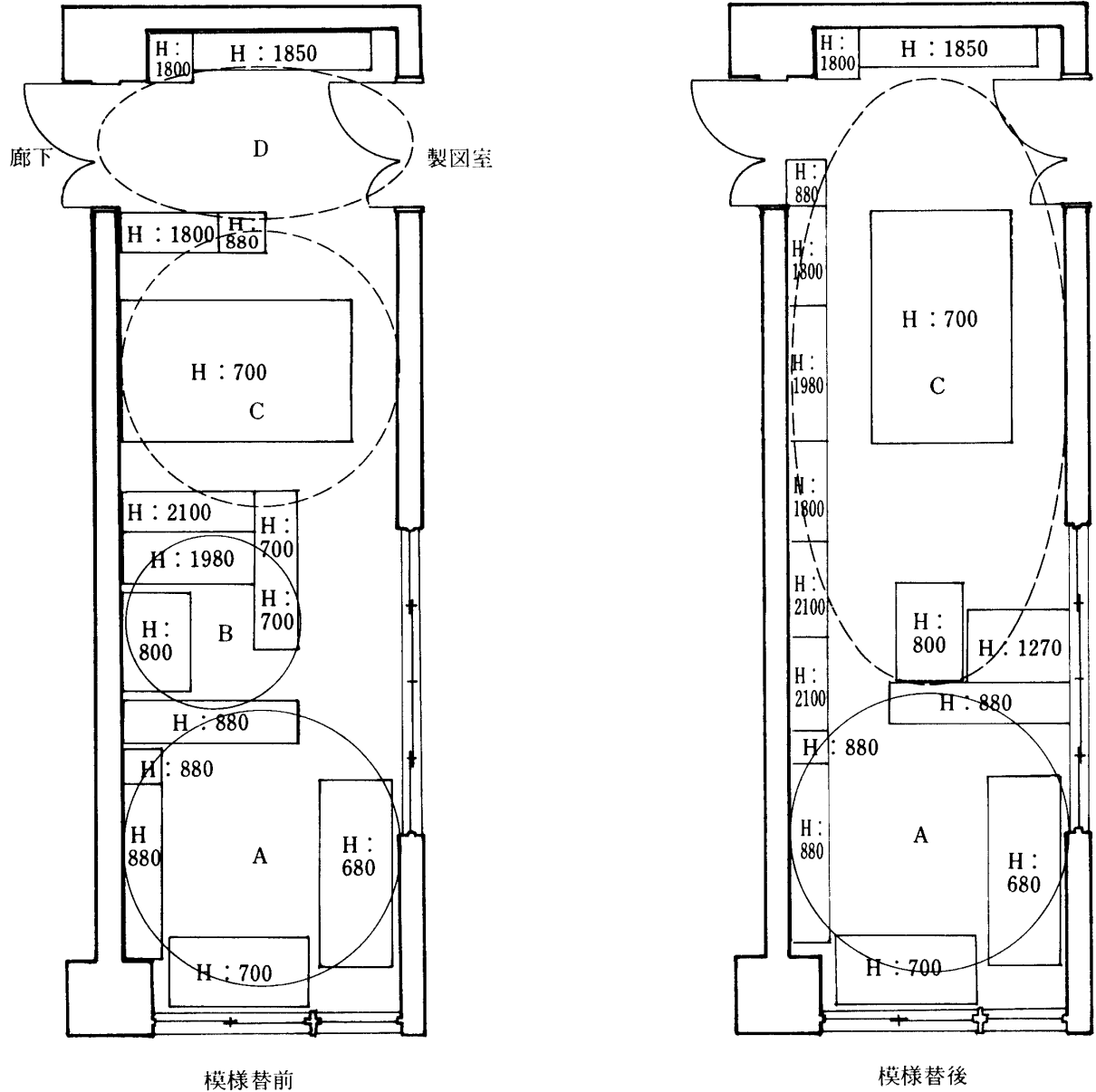


図5-1 空間構成の変化

表1 領域の変化

模様替前				模様替後			
人的要素	モノ的	区画	領域	人的要素	モノ的	区画	領域
対象 行為	家具の高さ			対象 行為	家具の高さ		
一般		通路 D		一般			
学生	図書閲覧	C	共存	学生	図書閲覧	C	共存
先生	採点 打合せ 教材作成			先生	採点 打合せ 教材作成		
	製図	B	個人		製図	A	個人
助手 (筆者)	事務 学習	A		助手 (筆者)	事務 学習		
	H: 1000				H: 880		

しかし、筆者は自分の場として困うことで精神的には安定していたようである。もし、強制的に他方のプラン構成が実施されていたならば、個人の確立をなしえていない日本人が、個の確立をなしえた民族が住むにふさわしい空間の中では無理が生じてくる²⁴といわれるようなもので、住空間と精神の発達のアンバランスが

ストレスの原因になっていただろうという気さえする。

(2)模様替え前後の領域の比較 (表1参照)

図5-1に示すように、設計準備室の家具の配置による空間構成は、4分割(A・B・C・D)から2分割(A・C)に変化した。個人領域が狭

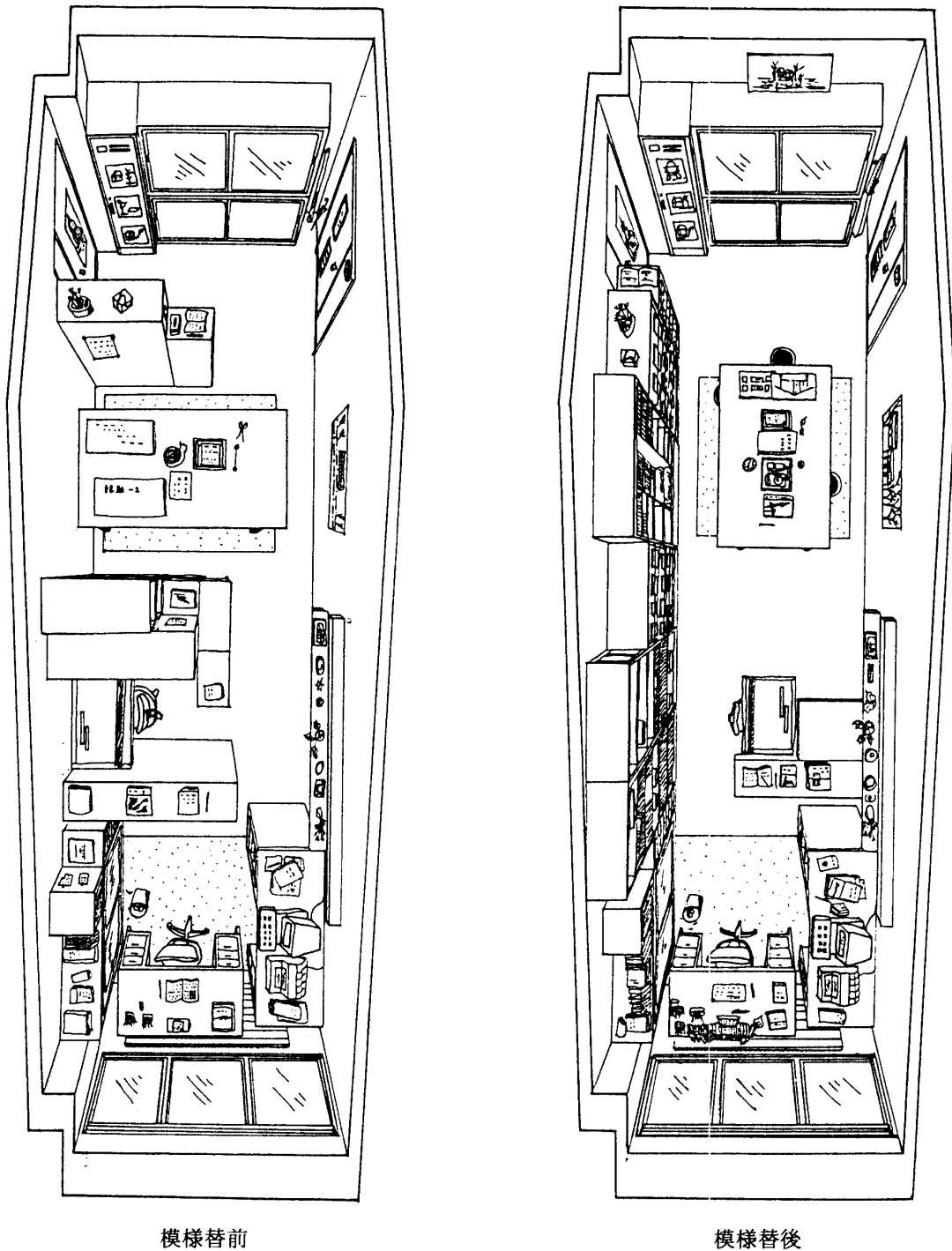


図 5-2 室内構成の変化

まり、共存領域がひろくなり、交通路としての通路の区分けもなくなった。

学生の出入りが頻繁になり滞留時間も長くなった。また、筆者のいるといたないにかかわらず、個人的な作業をしたり、雑誌を見たり、時にはおしゃべりをしていることもある。製図机も無断で使用していることもしばしばである。

全体的に部屋が整然として明るくなった。模様替え前は家具の高さ(高さの平均は1690)で区画することで、行為を分化していたので室内も暗かった。最近の学生の意識の中で設計準備室の用途に個人的な要素が含まれていることは希薄である。開放的に一変した。

(3)新たな問題点

設計準備室の環境を整備するときに、筆者の自己中心的な気持ちが起これば教員と学生を締め出すことになりかねない。したがってその辺の共存の成立を可能にし、和合していくためにも具体的なものがないと規律がなくなるということを考えながら、容赦なく出入りする学生に設計準備室に個室の要素が含まれていることをわからせるためのルールが必要となる。

この点については居住地における人間関係の生活の規範を作ることで規制しなくても無意識に行動を制御し、秩序として落ち着きを感じするような空間構成の可能性をめぐって Parsonal Space の研究分野での問題点でもある。

(4)実験的実証例の試み——その方法的段階

以上、内外的变化を体験したままに考察してきた。この体験経緯を方法化して統計的な確信を得るに至らせることができるかどうかは、今後筆者が教育的意識の中で学生の「生き方」を問い、生活の変化を起こさせることに始め、検討することである。

その方法として筆者が学生を意識的に刺激し、心の変化とその行動をみるためにカウンセリングを試みる。被験者である学生には筆者が

本人の自己の確立の達成(思考の転換)を目指していることは知らせない。週に4日の1時間程度のコミュニケーションをする。その際、被験者への質問事項として生活空間と人間関係の変化、性格の変化、それから何をしようとしているか、等の報告をさせる。被験者が自分を語るようになったら、筆者が刺激した内容と心の変化と空間の模様替えの関係を時系列的に観察してノートを作成させる。

VI. ま と め

以上の考察を要約すると次のようになる。

- 1) 時代は生活と労働の構造転換を求めている。
- 2) 構造転換の中で、まず、人間の主体形成が必要とされている。
- 3) 主体形成は教育に成熟化させられることが期待されている。
- 4) もし、個人の自己の確立が空間構成として物の存在に射映し、欲求が物の現われであり、それらに人間性発達の変化過程を認識することができるならば、自他を理解する一助になり、人と時と所に対して提案をすることができるであろう。

最後に非力の為に問題意識と願望だけが先行して、内容の具体性に憾みもなくはない。今後人間性の発展のために学生の自己確立の体験を促してさらに空間観察と分析が可能になるならば、それは健全な隣人の精神と空間の関係を整理することの役割を担えないであろうかという課題をふまえて研究を進めていきたい。

イラストを書いてくれた学生の大塚美紀嬢に感謝する。

注

- (1) 河合隼雄編『ユング心理学』新曜社、1986年。
- (2) エドワード・T・ホール、岩田・谷訳『文化を越えて』TBSブリタニカ、1984年。
- (3) 水島恵一『イメージ・芸術療法』大日本図書、1985年、P. 3。

- (4) 池上淳『日本経済論』同文館，1981年，pp. 70-78.
- (5) 基礎経済学研究所『2 変わる労働と生活』青木書店，1987年，pp. 13-46.
- (6) 田中恒子『建築雑誌』Vol. 102, No. 1262, 日本建築学会，1987年8月，p. 88.
- (7) ルドルフ・アラーズ，西園・板谷訳『実存主義と精神医学』岩崎書店，1969年，pp. 16-18.
- (8) クロイワ・カズ『日本経済新聞』日本経済新聞社，1987年9月22日夕刊.

最近仕事のストレス解消をスポーツに求める女性が増えている。その人々の服装が非常にこっていることが印象的であった。英国ではスポーツを始めるときは手持ちのぼろふくを着る。そして長続きしそうだとかるとスポーツウエアを買って揃える。日本ではだいたい逆で、靴はとっても大事なのに、不潔で粗末なものが多い。服装や道具への高い投資は途中で投げ出さないための効果があるという理由のようだが実際には長続きしない。確かに義務感からスポーツをやる人も少なくない。また、ひどく熱心にやる。スポーツはまず、楽しむもの、その意義は勝つことではなく参加することにある。真剣すぎるから、もろいのでは……

- (9) 水島恵一『人間性の探求』大日本書店，1985年，p. 344.
- (10) 森有正『古いものと新しいもの』日本基督教団，1975年，pp. 9-57.

その経験ということにある時目ざめた時に、その経験の全体が自分なのだ、それが1人の人間というものの意味なのだ、つまり、私が経験を持っていることを本当の意味で感じる、あるいは経験を持っていることを経験するというのはおかしいけれども、私どもの現実が実は私の経験そのものである。そしてそれが私自体である。

私の言う現実には経験によってみられた事実で、主観的な現実では全然ありません。

- (11) 西尾敬義『マクファースンの民主主義理論』お茶の水書房，1982年，p. 3.
- (12) モーリス・メルロ・ポンティエー，滝浦・木田訳『眼と精神』みすず書房，1966年，pp. 253-301.

- (13) 水島恵一『自己と存在感』大日本書店，1986年，p. 12.
- (14) 小此木啓吾『精神分析ノート2』日本教文社，1966年，pp. 91-93.
- (15) 廣松渉『存在と意味』岩波書店，1982年，pp. 381-394.
- (16) 山崎康佑『現象学の展開』新曜社，1974年，p. 12.
- (17) 吉阪隆正『住居の意味』頸草書房，1986年，pp. 178-191.
- (18) 石川元編『家と家族療法』金剛出版，1987年，pp. 9-28.
- (19) エドモンド・リーチ，青木訳『文化とコミュニケーション』紀ノ国屋書店，1984年，p.p. 11-21. ……実証主義というのは、あくまでもフィールドを中心とした目に見える観察可能な部分を中心に文化および社会について論じていく立場で、リーチはこれは機能主義のことであると他のところで言っている。それに対して、文化の目に見えない、隠れた論理をとにかく掘り起こそうとする立場を、彼は論理主義と呼んでいる。
- (20) 聖書「マタイによる福音書」日本聖書協会，1979年，p. 4. ……イエスは答えて言われた、「^{ひと}人はパンだけで生きるものではなく、^{かみくち}神の口から出る1つ1つの^{ことば}言で生きるものである」と書いてある」。
- (21) 山口昌男『文化人類学への招待』岩波書店，1982年，p. 20. ……人類学は、自分たちがあたりまえだと思っていることにいろいろな変種があるということを明らかにする。その変種のなかでもかつては日本よりヨーロッパが上であって、そこに近づくように努力し、それ以外のものはみんな程度の低いものだと考えていた。ところがそのような変種の、背後にある意味を考えていくと、今日、その違いは程度の高低の違いではなく、人間のあり得る姿の1つという意味で、1つ1つはまったく対等なわけです。ですからわれわれはいろいろあり得る姿のうちの1つを、自分たちのものとして知っているにすぎないけれども、それはほかの形で現われうる

ものなのです。

- (22) 犬養道子『花々と星々』中央公論社, 1974年,
p. 56.

「天才」と「ほんもの」——この2つの言葉こそ、
耳にたこが出来るくらいに、物心ついた途端から
聞かされつづけた言葉であった。天才とは、自己の
内部の生命力を把握しつくし育てつくし開花させ
切った人のこと。ほんものとは、人真似をせず自己
に徹した人のこと。

世界中が薔薇になってしまって、自分ひとりが

葱であったら飽くまで葱で生きること……世界中
が薔薇を尊しとしわれもわれもと薔薇を装い薔薇
をまとも、葱は葱でひとり生きる、葱のいのち
に徹して生きる。そういうような自個は、「人類の
意志」に即するものであり、だからそのままに全人
類に深く通じる共感をわが身にも味わい他にも味
わわせることが出来る……。

- (23) 小此木啓吾, 前掲書, pp. 74-75.

- (24) 外山知徳『静岡大学教育学部研究報告』No.
32. 静岡大学, 1981年, p. 81.

参考文献

- | | | | |
|-----------------------|---------------|-----------|------|
| 1. 原ひろ子 | 人間はわかりあえるか | PHP | 1976 |
| 2. E・M・トーマス 荒井訳 | ブッシュマン | 海鳴社 | 1982 |
| 3. 綾部編 | 女の文化人類学 | 弘文堂 | 1982 |
| 4. エドワード・T・ホール 宇波訳 | 文化としての時間 | TBS ブリタニカ | 1983 |
| 5. 山崎正和 | 柔らかい個人主義の誕生 | 中央公論社 | 1984 |
| 6. 安西照夫 | マヤ人の精神世界への旅 | 大阪書籍 | 1985 |
| 7. 山田和夫 | 文化なき家族の病理 | 大和出版 | 1985 |
| 8. 大平健 | 貧困の精神病理 | 岩波書店 | 1986 |
| 9. 波平喜美子 | 暮らしの中の文化人類学 | 福武書店 | 1986 |
| 10. 石毛直道 | 住居空間の人類学 | 鹿島出版 | 1971 |
| 11. 秋岡芳夫 | 住 | 玉川選書 | 1977 |
| 12. 谷川俊太郎 | 住む | 平凡社カルチャ | 1979 |
| 13. オギュスタン・ベルク 宮原訳 | 空間の日本文化 | 筑摩書房 | 1985 |
| 14. 加藤孝義 | 空間のエコロジー | 新曜社 | 1986 |
| 15. 八束はじめ | 空間思考 | 弘文堂 | 1986 |
| 16. 本多友常 | ゆらぐ住まいの原理 | 学共出版社 | 1986 |
| 17. S・I・ハヤカワ 大久保訳 | 思考と行動における言語 | 岩波書店 | 1951 |
| 18. 福武直編 | 講座社会学3 | 東京大学出版會 | 1975 |
| 19. マルティン・ブーハー 田口訳 | 我と汝の対話 | みすず書房 | 1978 |
| 20. F・ブローデル 村上訳 | 日常性の構造 | みすず書房 | 1985 |
| 21. 寺田篤弘 | 社会学の方法と理論 | 新泉社 | 1986 |
| 22. 佐伯勝 | 認知科学の方法 | 東京大学出版會 | 1986 |
| 23. リズ・ローマン・ガレーズ 江川訳 | ハーバードの女たち | 講談社 | 1987 |
| 24. C・ギアーツ 吉田他訳 | 文化の解釈学Ⅰ・Ⅱ | 岩波現代選書 | 1987 |
| 25. ティヤールド・シャルダン 美田他訳 | 現象としての人間 | みすず書房 | 1969 |
| 26. 山口昌男 | 人類学的思考 | 筑摩書房 | 1979 |
| 27. ポール・ローゼン 福島他訳 | アイデンティティ論を超えて | 誠信書房 | 1984 |
| 28. 河合隼雄編 | 家族精神療法 | 金剛出版 | 1984 |

29.	越賀一雄	大脳病理と精神病理のあいだ	金剛出版	1982
30.	小此木啓吾	精神分析ノート1	日本教文社	1964
31.	小此木啓吾	精神分析ノート3	日本教文社	1969
32.	大田堯	戦後日本教育史	岩波書店	1978
33.	ヴィオレ・ル・デュック 飯田訳	建築講話	中央公論美術出版	1986
34.	黒川紀章	共生の思想	徳間書店	1987
35.	篠山紀信	作家の仕事場	新潮社	1986
36.	妹尾河童	河童が覗いた仕事師12人	平凡社	1987
37.	同上	河童が覗いた50人の仕事場	朝日新聞社	1986